

保育者養成課程学生における保育者志望動機と「こども」イメージとの関連

—入学時の志望動機と「こども」イメージ—

Motives of childcare trainees and images of children in students of early childhood practitioners training course at university admission

上 長 然

Moyuru Kaminaga

問題と目的

「こども」をどのようにとらえ、どのような存在として理解しているかという「こども」に対するイメージは、保育を担う学生にとって重要である。

幼稚園・保育所およびその他の児童福祉施設には、こどもの発達を保障し、教育・養育をする役割がある。それぞれの幼稚園・児童福祉施設の場において行われる具体的な教育・保育活動は、保育者自身の「こどもイメージ（こども観）」や「保育観」によって行われる。保育者が今日の社会状況やこどもの状況を鑑みながら、どのようなこどもイメージや保育のあり方を考えるかは、現実場面での保育の質を大きく左右すると考えられる。また、「専門職」としての保育の確立と向上の基礎になるものでもあると考えられる。

女子中学生・高校生を対象にこどもイメージを研究した伊藤・武藤（1987）によると、こどもに対する興味関心の高い生徒は、こどもに対して明朗で扱いやすく、敏感で健康な、無邪気なイメージが強いことが示されている。こどもに対して良好なイメージを持つ場合には、こどもに対して親和的・受容的となるが、こどもに対するイメージが悪ければ回避的・拒否的になる（岡野，2003）ことも考えられる。つまり、保育者養成課程に入学する学生がどのような「こども」イメージを持っているかは保育者としての資質を高めていくうえで重要な鍵となると思われる。

そこで、本研究は保育者養成課程に入学した学生がどのような動機で保育者を志望し、入学時の志望動機とこどもに対するイメージの関連を検討することを目的とした。

方 法

調査対象：保育者養成課程に所属する短期大学1年生35名（女性33名，男性2名）

調査内容：(1) 保育者志望動機：長谷部 (2006) による保育者志望動機尺度を使用した。本尺度は保育者志望の動機について問う 17 項目であり、「憧れ」「適性」「やり甲斐」「無目的同調」「専門職志向」の 5 つの下位尺度から構成されている。各項目について、「全くそう思わない」～「とてもそう思う」までの 5 段階評定で回答を求めた。

(2) こどもに対するイメージ：内田・古谷・兼松・中村 (1993) によるこどもに対するイメージ 40 項目を使用した。各項目について、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの 5 段階評定で回答を求めた。

調査手続き：短期大学へ入学直後の 2009 年 4 月に無記名式質問紙調査による一斉調査を実施した。回答にあたっては、プライバシーは保護されること、調査以外に使用されることはないこと、回答が難しい場合は回答しなくてもよいことが紙面上で教示された。

結果と考察

1. 基礎統計

Table1 および Table2 には本研究の対象者における保育者志望動機およびこどもに対するイメージについて平均値および標準偏差を示した。

まず、本研究の対象者における保育者志望動機を見てみると、「憧れ」「適性」「やり甲斐」といった保育者に対する動機が高く、次いで「専門職志向」であり、資格や就職に関連する項目で得点が高かつ

Table1 調査対象者における保育者志望動機の平均値および標準偏差

憧れ	(5~15)	12.06 (2.97)
適性	(7~25)	22.88 (2.20)
やり甲斐	(5~15)	12.39 (1.84)
無目的同調	(5~15)	5.30 (2.30)
専門職志向	(5~15)	10.19 (2.72)

Table2 調査対象者におけるこどもに対するイメージの平均値および標準偏差

かわいい	4.94 (.24)
生き生きしている	4.76 (.56)
エネルギーッシュ	4.85 (.44)
可能性がある	4.55 (.67)
純粋	4.73 (.45)
素直	4.76 (.56)
正直	4.55 (.67)
敏感	3.91 (.82)
無防備	3.97 (1.00)
わがまま	3.67 (.85)
自分本位	3.42 (1.00)
小さい	4.25 (.76)
未熟	3.73 (1.01)
よく泣く	3.36 (.99)
真似が上手	3.64 (.93)
意外な行動や考えを持つ	4.67 (.60)
興味、好奇心が旺盛	4.94 (.24)
集中している時間が短い	3.48 (1.06)
感情をはっきりしている	4.55 (.67)
気分が変わりやすい	3.76 (.87)
表現が豊か	4.58 (.71)
成長・発達が著しい	4.36 (.82)
年齢によってまったく違う	4.42 (.79)
こどもなりの意志をもつ	4.45 (.75)
遊びが大好き	4.91 (.29)
遊びが生活の中心	4.24 (.94)
理解力は大きい	3.33 (1.05)
想像力がある	4.39 (.70)
かわいいと思うと通じる	3.79 (1.08)
接し方がむずかしい	2.97 (1.19)
大人が導く必要がある	3.85 (.87)
まわりの影響をうけやすい	4.12 (.93)
好き	4.85 (.57)
楽しい	4.94 (.24)
おもしろい	4.91 (.29)
うるさい	2.76 (1.32)
こわい	1.67 (.82)
一緒にいると疲れる	1.73 (.80)
苦手	1.45 (.87)
嫌い	1.18 (.46)

た。また、「ただ何となく」といった「無目的同調」の得点は5.30と非常に低く、研究対象においては、保育者養成校への進学に対して無目的な対象者が少なかった。

次に、本研究の対象者におけるこどもに対するイメージを見てみると、ニュートラルポイントである3点を下回った項目は、「接し方がむずかしい」「うるさい」「こわい」「一緒にいると疲れる」「苦手」「嫌い」であり、こどもに対する否定的なイメージの項目で得点が低かった。一方、「かわいい」「興味・好奇心が旺盛」「楽しい」「おもいしroit」といった肯定的なイメージに得点が高く、本研究の対象者は、こどもを肯定的な存在として認知していることが示された。

保育者養成課程に進学している学生は概ねこどもに対する肯定的イメージが強いことが示され、肯定的なイメージを抱いて保育者養成課程に進学していることが考えられる。

次に、保育者志望動機の下位尺度とこどもに対するイメージとの相関係数を算出した（Table3）。まず、「憧れ」とこどもに対するイメージとの相関を見ると、「よく泣く」「集中している時間が短い」「好き」「楽しい」と正の有意な相関が認められた。また、「うるさい」「一緒にいると疲れる」「苦手」と負の相関が見られた。

「適性」との相関を見ると、「小さい」「未熟」「まわりの影響を受けやすい」「楽しい」と正の相関が、「一緒にいると疲れる」「嫌い」と負の相関が見られた。

「やり甲斐」との相関では、「未熟」「真似が上手」「かわいいと思うと通じる」と正の相関が認められた。

「無目的同調」との相関では、「楽しい」と負の相関、「苦手」「嫌い」と正の相関が見られた。

「専門職志向」はいずれのこどもに対するイメージとも相関関係が認められなかった。

これらは、いくつかの特徴的な結果を示していると考えられる。

まず、保育者志望動機の「無目的同調」の得点の高さは「楽しい」と負の相関、「苦手」「嫌い」と正の相関関係であった。保育士養成課程への進学に際して「ただ何となく」「周囲の人がすすめるから」保育者を志望した得点が高い者は、こどもに対して否定的なイメージを持ちやすいと考えられた。

また、「憧れ」「適性」「やり甲斐」の得点の高さは「好き」「楽しい」「かわいいと思うと通じる」といった肯定的なイメージと正の相関関係にあり、「うるさい」「一緒にいると疲れる」「苦手」と負の相関関係にあった。これは、保育者という職業に対する肯定的なイメージはこどもに対する肯定的なイメージと結びつきやすく、否定的なイメージを抱いていないことを示していると考えられる。

さらに、「憧れ」「適性」「やり甲斐」の高さは「よく泣く」「未熟」「小さい」というこどもイメージと正の相関関係にあるという興味深い結果が得られた。これは、保育者に対して肯定的なイメージを持って保育者を志望する動機の高さは、こどもを「未熟」で「小さく」、「よく泣く」存在としてイメージしていることを示している。では、なぜ保育者に対して肯定的なイメージを持って保育者を志望する動機はこうしたイメージと結びつくのであろうか。そのひとつに保育者を志望する動機を高め

Table3 保育者志望動機と子どもに対するイメージの相関係数

	憧れ	適性	やり甲斐	無目的 同調	専門職 志向
かわいい	.01	.22	.13	-.08	.02
生き生きしている	-.08	.20	.13	.03	.03
エネルギーッシュ	.17	.08	.11	-.14	-.03
可能性がある	-.22	.05	.05	.34	.01
純粹	.04	.19	.21	.02	.10
素直	.12	.08	.22	.01	.05
正直	.08	-.08	.07	.13	-.04
敏感	-.24	.15	.02	.22	.08
無防備	-.06	.32	.21	.05	-.12
わがまま	-.16	.11	.07	.21	-.21
自分本位	-.15	.11	.03	.11	-.19
小さい	.18	.38 *	.33	-.02	.14
未熟	.02	.35 *	.36 *	.04	.02
よく泣く	.38 *	.23	.28	-.24	-.06
真似が上手	.27	.33	.38 *	-.03	.32
意外な行動や考えを持つ	-.20	-.01	.15	.08	.02
興味、好奇心が旺盛	.01	.22	.13	-.08	.02
集中している時間が短い	.41 *	.20	.17	-.09	-.04
感情がはっきりしている	-.19	.15	.15	.17	.14
気分が変わりやすい	.09	.29	.12	-.07	.26
表現が豊か	.15	-.05	.08	.10	.09
成長・発達が著しい	-.10	.20	-.10	.02	.14
年齢によってまったく違う	-.04	.10	-.05	-.04	-.10
こどもなりの意志をもつ	-.18	.00	-.11	.10	.07
遊びが大好き	.11	.27	.07	-.19	.06
遊びが生活の中心	.32	.17	.14	-.27	.22
理解力は大きい	.19	.06	.30	.07	.21
想像力がある	.18	-.11	.19	.12	.08
かわいいと思うと通じる	.07	.25	.45 **	.00	.08
接し方がむずかしい	-.08	.08	-.05	.13	.17
大人が導く必要がある	.27	-.01	.12	-.12	-.18
まわりの影響をうけやすい	.26	.36 *	.30	-.31	.00
好き	.38 *	.03	.27	-.28	.04
楽しい	.35 *	.45 **	.13	-.53 **	-.22
おもしろい	.04	.18	.07	-.05	-.06
うるさい	-.35 *	-.13	-.09	.16	-.16
こわい	-.25	-.16	-.06	.32	-.04
一緒にいると疲れる	-.40 *	-.39 *	-.12	.27	.09
苦手	-.39 *	-.21	-.33	.45 **	.08
嫌い	-.26	-.56 **	-.34	.47 **	.22

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

るものとして「養護性」の高さがあると考えられる。「養護性」とは、相手の健全な発達を促進するための共感性と技能を指し、広く弱いものを慈しみ育てようとする資質（小嶋，1989）である。つまり、弱いものを慈しみ育てようとする養護性の高い者が保育者という職業に憧れをもって保育者と志望し、その養護性の高さから子どもを「未熟」で「小さい」存在としてイメージし、守るべき対象として捉えているのではないかと考えられる。

2. 保育者志望動機得点によるクラスター分析

保育者志望動機と子どもに対するイメージの相関関係の検討から、「憧れ」「適性」「やり甲斐」「無目的同調」という4つの下位尺度が子どもに対する何らかのイメージと相関関係にあった。そこで、本分析では、「憧れ」「適性」「やり甲斐」「無目的同調」の4つの側面のバランスが、子どもに対するイメージにどのように関係するかを検討するために、保育者志望動機のうち4つの下位尺度の得点を標準化し、Ward法を用いたクラスター分析を行った。2-8のクラスター数を設定して分析を試み、各クラスターに含まれる対象者の数、クラスターの解釈可能性などから総合的に判断した結果、2クラスターによる分類が保育者志望動機のバランスの特徴を最もよく表していると考えられた。Figure1は、2クラスター分類におけるクラスターごとの保育者志望動機尺度の標準得点の最終クラスター中心を示したものである。なお、それぞれのクラスターにおける最終クラスター中心に対して、零を検定値とするt検定を行った結果、全ての下位尺度で有意な差が見られた。

各クラスターの特徴は以下の通りである。

第1クラスター（7名）：憧れ・適性・やり甲斐が平均より低く、無目的同調が平均より高い群（無目的志望群）。

第2クラスター（26名）：憧れ・適性・やり甲斐が平均より高く、無目的同調が平均より低い群（積極的志望群）。

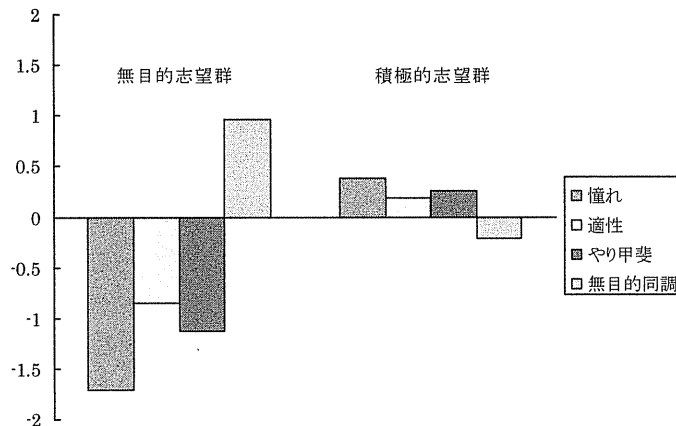


Figure1 保育者志望動機尺度のクラスターごとの特徴

3. 保育者志望動機のクラスターによる「こどもに対するイメージ」の比較

保育者志望動機のクラスター分類によってこどもに対するイメージが異なるかを検討した。保育者志望動機のクラスター分析で得られた「無目的志望群」「積極的志望群」を独立変数、こどもに対するイメージ 40 項目を従属変数とする分散分析を行った (Table4)。

その結果、「エネルギーッシュ」「よく泣く」「まわりの影響を受けやすい」「好き」「楽しい」「苦手」において有意な主効果が認められ、「積極的志望群」は「無目的志望群」より「エネルギーッシュ」「よく泣く」「まわりの影響を受けやすい」「好き」「楽しい」の得点が有意に高かった。また、「無目的志望群」は「積極的志望群」よりも「苦手」の得点が有意に高かった。

これらのクラスター分析およびクラスター分析に基づくグループによるこどもに対するイメージの比較からいくつかの結果が得られたと考えられる。

まず、保育者養成課程への入学時点において、保育者への憧れや保育者になることを夢をもって保育者を積極的に目指して入学してきているグループと、「ただ何となく」「周囲の人がすすめるから」保育者養成課程に入学してきているグループが存在していることである。

本研究では分析対象者であった 33 名のうち 26 名 (78.8%) は積極的志望群に属しており分析対象者の大多数は積極的に保育者になることを志望して保育者養成課程に入学していることが示された。一方、7 名 (21.2%) は「ただ何となく」「すすめられる」ため無目的に保育者養成課程へ進学していることも示され、専門職養成課程である保育者養成課程への進学者にも積極的に保育者を目指しているわけではない者が存在していると考えられる。

次に、積極的志望群と無目的志望群においてこどもに対するイメージを比較したところ、積極的志望群の方がこどもを「エネルギーッシュ」で「楽しい」存在としてとらえ、「好き」であった。また、無目的志望群のほうがこどもを「苦手」に感じていた。これは、積極的に保育者を志望する者の方がこどもを活発な存在として捉えていることを示していると考えられる。また、入学時において特別保育者を目指していない者はこどもに対して積極的な意味を見出しにくいと考えられる。

また、「よく泣く」「まわりの影響を受けやすい」というイメージが積極的志望群の得点が高かった。これは先述したように保育者に対して肯定的なイメージをもって志望する者ほど養護性が高いためこどもを「よく泣き」「まわりの影響を受けやすい」ために慈しみ育てる必要がある存在であると考えていると思われる。

これらの結果を合わせて考えると積極的志望群はこどもに対して肯定的なイメージだけをもってしているのではなく、養護すべき存在としても理解していると考えられる。この結果は、さまざまな側面をもつ「こども」という存在に対して、一方的なあるいは盲目的な見方ではなく、複眼的で多様なイメージを持っていると考えられる。岡野 (2003) は、女子学生と幼稚園児母親を対象にこどもに対するイメージの比較を行い、女子学生はこどもを一側面的に捉えがちであるのに対して、幼稚園児の母親はこどもを「大切であり、いとoshii」が「難しい」というアンビバレントなイメージを抱いてい

Table4 保育者志望動機別に見たこどもに対するイメージ得点

	無目的志望群	積極的志望群	F値
	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)	
かわいい	4.83 (.41)	4.96 (.19)	1.42
生き生きしている	4.67 (.82)	4.78 (.51)	.19
エネルギーッシュ	4.50 (.84)	4.93 (.27)	5.16 *
可能性がある	4.83 (.41)	4.48 (.70)	1.39
純粹	4.67 (.52)	4.74 (.45)	.13
素直	4.50 (.55)	4.81 (.56)	1.58
正直	4.50 (.55)	4.56 (.70)	.03
敏感	4.40 (.55)	3.81 (.83)	2.25
無防備	3.83 (1.33)	4.00 (.94)	.13
わがまま	3.67 (1.03)	3.67 (.83)	.00
自分本位	3.50 (1.05)	3.41 (1.01)	.04
小さい	3.83 (.75)	4.35 (.75)	2.30
未熟	3.67 (.82)	3.74 (1.06)	.03
よく泣く	2.50 (.55)	3.56 (.97)	6.48 *
真似が上手	3.33 (1.03)	3.70 (.91)	.77
意外な行動や考えを持つ	4.67 (.52)	4.67 (.62)	.00
興味、好奇心が旺盛	4.83 (.41)	4.96 (.19)	1.42
集中している時間が短い	2.83 (.98)	3.63 (1.04)	2.91
感情がはっきりしている	4.67 (.52)	4.52 (.70)	.24
気分が変わりやすい	3.67 (.82)	3.78 (.89)	.08
表現が豊か	4.33 (.82)	4.63 (.69)	.85
成長・発達が著しい	4.50 (.84)	4.33 (.83)	.20
年齢によってまったく違う	4.33 (.82)	4.44 (.80)	.09
こどもなりの意志をもつ	4.67 (.52)	4.41 (.80)	.57
遊びが大好き	4.83 (.41)	4.93 (.27)	.49
遊びが生活の中心	3.67 (1.21)	4.37 (.84)	2.94
理解力は大きい	3.17 (.98)	3.37 (1.08)	.18
想像力がある	4.17 (.98)	4.44 (.64)	.76
かわいいと思うと通じる	3.67 (.82)	3.81 (1.14)	.09
接し方がむずかしい	3.33 (1.51)	2.89 (1.12)	.68
大人が導く必要がある	3.33 (.82)	3.96 (.85)	2.71
まわりの影響をうけやすい	3.33 (.82)	4.30 (.87)	6.15 *
好き	4.17 (1.17)	5.00 (.00)	15.47 **
楽しい	4.67 (.52)	5.00 (.00)	12.68 **
おもしろい	4.83 (.41)	4.93 (.27)	.49
うるさい	3.50 (1.22)	2.59 (1.31)	2.41
こわい	2.17 (.98)	1.56 (.75)	2.91
一緒にいると疲れる	2.17 (.75)	1.63 (.79)	2.29
苦手	2.50 (1.52)	1.22 (.42)	15.37 **
嫌い	1.50 (.84)	1.11 (.32)	3.73

*: $p < .05$ **: $p < .01$

ることを示している。また、柏木・若松(1994)は「親になること」による人格発達のなかで母親は肯定的感情と否定的感情を併せ持つことを指摘している。

こうした岡野(2003)や柏木・若松(1994)の指摘を保育者養成に援用して考えると、保育者として資質を高めるためには、こどもを一側面からプラスイメージのみで捉えるのではなく、プラスイメージとともにマイナスイメージを含む複眼的で多様な理解が必要であると考えられる。つまり、こどもの多面性と多様性に気付き、その複雑さを受け止め養護していこうとする視点の形成が重要であると考えられる。積極的志望群は無目的志望群に比して、こうした複眼的な視点を保育者養成課程に入学した時点で持ち合わせていると思われる。一方、無目的志望群に対しては複眼的な視点でこどもを捉えることができるような指導が重要であると考えられる。

以上のように本研究では保育者養成課程への入学時における保育者志望動機とこどもに対するイメージについて検討した結果、積極的に保育者を志望する者は多様な側面をもつ「こども」に対して複眼的に理解しようとしていることが示された。

最後に、本研究では保育者養成課程入学時における保育者志望動機とこどもに対するイメージの比較であったが、積極的志望群や無目的志望群が保育者になるための専門教育を通してどのように「こども」イメージが変化するか検討する必要がある、今後の課題としたい。

引用文献

- 長谷部比呂美 2006 保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価 淑徳短期大学研究紀要, 45, 115-130.
- 伊藤葉子, 武藤八重子, 1987, 保育領域における情意の指導と評価(第2報) 一子どものイメージ, 日本家庭科教育学会誌, 30(1), 67-72.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 小嶋秀夫編 1989 乳幼児の社会的世界 有斐閣, 170-186.
- 岡野雅子 2003 子どもに対するイメージ:女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆 信州大学教育学部紀要, 110, 57-67.
- 内田,雅代・古谷佳由理・兼松百合子・中村美保 1993 小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について 千葉大学看護学部紀要, 15, 35-43.